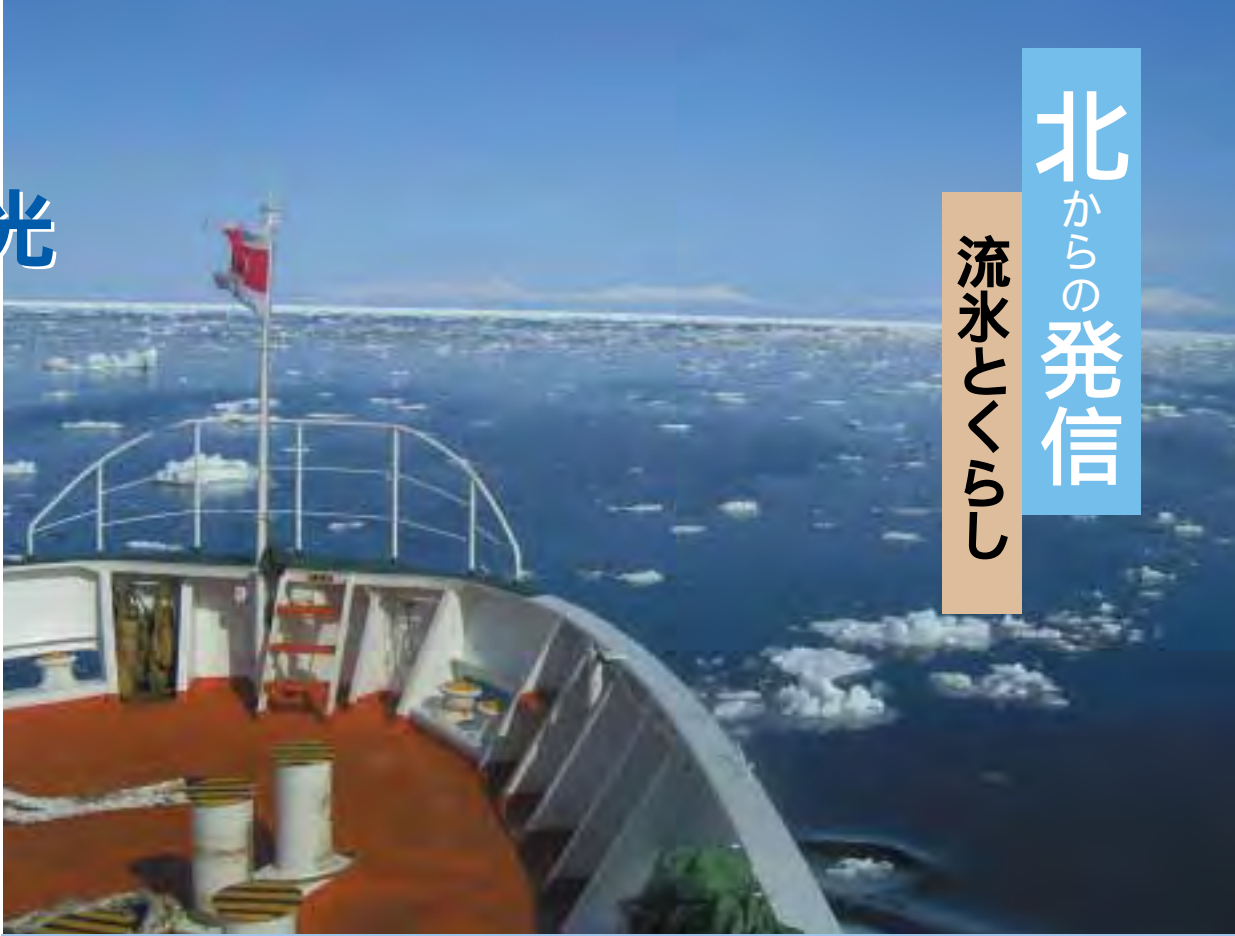


流水観光



「おーら」から見た流氷と知床半島の山並み

オホーツクの流氷とくらし

農林水産業が地域の主要産業であるオホーツク海沿岸では、流氷が豊かな海の環境を生み出し、世界的ブランドとなったホタテやサロマ湖特産の力キなどの生産を支えています。沿岸に暮らす漁師たちは、流氷の恩恵に頼るだけでなく、自ら禁漁期間を設定し、豊かで安定した水産資源

の利用を実践しています。また、サロマ湖内ではホタテや力キの過剰養殖による環境の悪化を防ぐため、養殖総量の規制と環境監視が続いています。さらに、植樹や河畔林の造成を漁師とその家族が行っています。このような流氷のもたらす恵みと自らの持続的漁業に対する取り組みによって漁師たちは安定した生活を送っています。

オホーツクの流氷観光

日本で唯一流氷を間近に見ることが出来るオホーツク海沿岸に位置する市町村は羅臼町から稚内市まで合計14あり、約18万2千人が生活しています。平成14年のこの地域への観光客入込数は820万人で、そのうち冬期(12月～3月)は156万人です。特に2月と3月だけで115万人、1日当たりすると2万人、網走市の人口の約半分がこの地域にやってきます。

自然を楽しむ

オホーツク海沿岸の特徴は、冬季に沿岸を埋め尽くす流氷と、その流氷によつて育まれる栄養分豊かで水産資源に恵まれた海域環境、原始性の高い自然景観です。

知床半島の北半分を占める知床国立公園は、オジロシシマフクロウなどの絶滅危く種が生息し、羅臼岳、硫黄山など火山性の山がちなっています。特に半島先端は崖が直接海に落ち込み陸上から人は近寄ることができない秘境の地です。2004年1月には日本政府により、知床の世界遺産推薦書がユネスコ世界遺産センターに提出されました。

網走国立公園は、サロマ湖、能取湖、網走湖など7つの海跡湖とその湖畔に咲く花、そして海岸線に沿つようにヒマナス、スカシユリなどの海岸植物が群落を作る原生花園となつています。特に、オホーツク海とサロマ湖に挟まれた砂州に約700haの規模で広がる常呂町のワツカ原生花園は国内最大規模の原生花園で、自然と共存し

ながら生活する漁師や地域の人々の手によつて大切に保存され、北海道遺産にもなっています。

冬季、流氷とともにオホーツク海沿岸に姿をあらわす動物といえばアザラシ(アイヌ語で「トツカリ」)やオオワシが有名です。オホーツク海

にはゴマフアザラシ、ワモンアザラシ、クラカケアザラシなどが生息していますが、彼らは流氷とともに沿岸にやってくる、子供を生み育てて、春には北極圏のほうへ帰っていきます。サロマ湖内には、エサの魚を追って数百頭のアザラシの大群が姿を現すのも珍しいことではありません。



サロマ湖に現れたゴマフアザラシの大群

流氷や氷・雪で遊ぶ

流氷を見ることそのものが地域の観光として人気を集めているのが、網走港の流氷観光砕氷船「おーら」と、紋別港のガリンコ号です。おーらは年間20万人以上、ガリンコ号は年間4万人以上の乗客を乗せています。氷を砕きながら進むその迫力は、乗船してみなければわかりません。目の前で厚い氷盤が割れて四方へ散らばっていく様子に、思わず「おー!!」と歓声を上げない人はまずいません。(私も何度も叫びました)

オホーツク海沿岸の市町村では、流氷に親しみ、寒さを楽しむ、冬季間にしかできない多彩なイベントやお祭りがたくさん行われています。「あばしりオホーツク流氷まつり」や、もんべつ流氷まつり」は全国的にも有名ですが、その他の地域でも雪や氷を遊び道具にしたり、凍った海面上でスボーツを楽しむ、住民参加型イベントが多数催さ

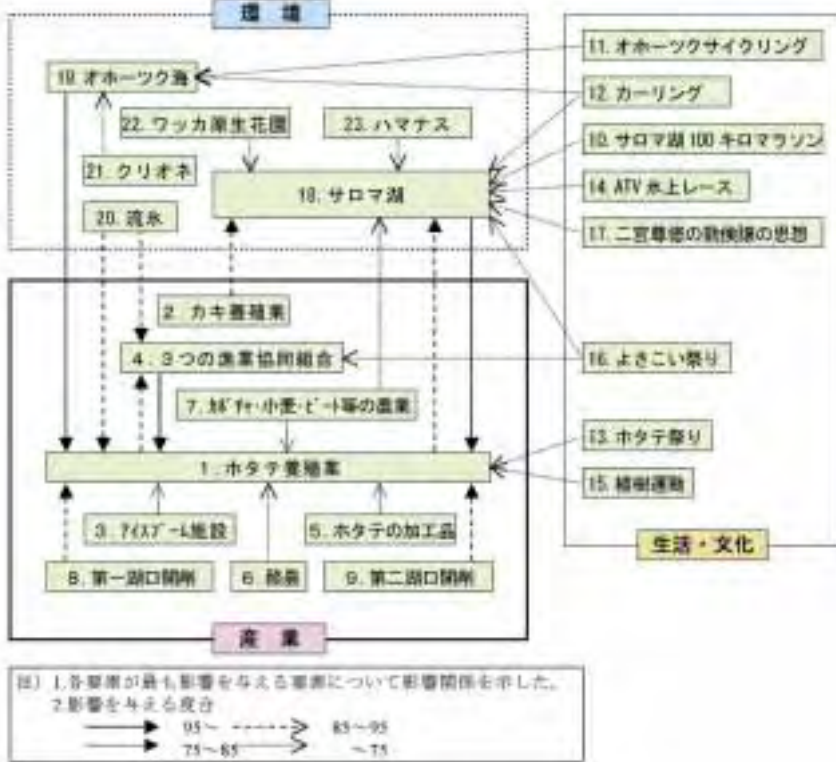


びっしり接岸した流水と漁港に上架された漁船



氷上パラセーリング。サロマ町の民宿やユースホステルで実施しています。

サロマ湖地区の環境社会システム



前実験で確認しまし

可能であること

面下でホタテの蓄養が

が食べることができ

た。マイナス2 くらい

は仮死状態 生きてい

た。マイナス2 くら

は仮死状態 生きてい